

参加者 110人 胸に響いた講師の話

福島からの避難者 磯貝潤子さん  
弁護士事務局長 馬奈木厳太郎さん

「磯貝さんの訴えから、福島が痛みがひしひしと伝わってきました。馬奈木さんの話からは国の欺瞞を切る鋭さを感じました。「何もしない」国民の無関心に対しても手厳しい。福島が痛みは日本の痛み、否、全人類の痛みであることを、我々は胸に刻むべきでしょう。」(参加者の感想より)

胸にズシンと響く講師のお二人の話でした。福島のかいびを会員・市民のみなさんと共有し合いたい—そんな思いで、Nさんがつどいをレポートしました。



【磯貝さんの話に心ふるわせて】

あの日(2011, 3, 11福島原発事故)から8年にもなろうとしている。新築したばかりの家を捨てて新潟への避難を決めるまでしばらくの時間を要した。この間の子どもたちのヒバクは大丈夫だったのか?…と、親の責任を問い続ける磯貝さん。子どもたちを守ろうと日々奮闘する母の姿に息をのむ。

ここに来て、ようやく家族そろって新潟で暮らすことを決めて歩き始めたとき、成長した子どもたちの「福島へ帰りたかった」の思いを知った驚きと悲しみ…。

時々、声をつまらせる磯貝さんの前で、聴く私たちの心がふるえた。

【生業訴訟弁護団の馬奈木厳太郎弁護士のことば】

馬奈木さんは「生業訴訟」に係わることになった理由を「あの日、福島原発事故を知ってしまった」「放っておけない」からだと話した。裁判で求めている「現状回復」は、事故前の3月10日に戻せではない。事故の原因をつくった原発のない事故前に戻せということである。国は被害者の選別をし被害をお金に矮小化して被害者の分断を謀っている。被害者が声をあげなければ、被害はないと国は結論づける…等々、裁判に触れながら馬奈木さんは目の前の私たちに問う。

◇最初に行われたことは言葉づくり。「事故」というが「事件」ではないのか、「風評被害」って本当は安全なのに、過剰な心配をすること?「自主避難」って必要なのに勝手に避難すること?ホント?

◇3・11後、一人一人の生き方が問われている。

◇無関心ではダメ。変えるためには声を出さなければならない。

目の前の私たち一人一人につきつ

無関心は、福島の人を傷つける  
みんなで声をあげ続けていきましょう!

更新がまだお済みでない方へ 12月から始まる新年度もぜひ会員の継続を!  
同封の振込用紙か封筒で年会費1,000円を納入ください。

1月の街頭行動 1月11日(金) 16:30~17:30 アオーレ前 ご参加を!